

「<N>を始める」についての考察
- 英語の "begin a <N>" との比較を中心に -

加藤 鉦三 ・ 黒田 航
信州大学 NICT¹

【1】 英語の事実

Pustejovsky (1995)・小野(2005)は、英語の動詞 begin が(1)のように出来事を表す事象名詞を目的語に取る場合だけでなく、(2)のように個体名詞を目的語に取った場合にも事象が含意されることに注目している。

- (1) a. They began the meeting at 10:30 a.m.
- b. They began a dance.
- (2) a. He began the book.
- b. She began the movie.

(2)で含意される事象は(3)で明示的に現れているものと等価である。

- (3) a. He began reading the book.
- b. She began watching the movie.

このことを、Pustejovsky や小野等の生成語彙意味論の立場では次のように説明する。

- (4) a. begin は項として事象 (event) を取る
- b. しかし事象の内容は形式クオリアにおいて無指定である
- c. 目的語が事象でない場合には、(a)により不整合が生じるが、
- d. 型の強要 (type coercion) により、目的語名詞の語彙情報から名詞と結びついた行為の解釈を引き出す
- e. (d)のタイプ強制が可能であるのは、(b)の不完全指定による²

【2】 日本語の事実

しかし日本語の「本を始める」においては、次のように、名詞「本」と直接結びついた「読む/書く」以外の行為を補完する解釈は文脈を整えればなんとか可能であるが、「本」と最も密接に結びついているはずの「読む/書く」を補完する解釈は得られない。これは英語において(2)の解釈が(3)と等価であることから見れば、驚くべき事実である。

- (5) a. *本を始めたが、まだ読みきっていない [「読む」を補完]
- b. *本を始めたが、また筆が進まない [「書く」を補完]
- c. 本を始めたが、なかなか売れない [「の取り扱い」を補完]
- d. ?今度は本を始めたが、スペースに苦慮している [「の取り扱い」を補完]³

¹ (独) 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター。

² しかし、例えば begin the book では「読み/書き始める」(begin reading/writing the book)の解釈はあるが、begin the dictionary では「調べ/編纂し始める」(begin consulting/compiling the dictionary)の解釈は難しいようである。どのような名詞でタイプ強制が可能であるのかという観察と、可能である場合・不可能である場合のそれぞれについて納得のいく理由を提示する必要があるだろう。これがこれから見てゆく日本語の場合と質的に異なっているのか検証の必要がある。

³ (5c)の「取り扱い」は商品としてのものであり、(5d)の「取り扱い」は収集や梱包の対象、つ

く」の意不可), 新しい料理(「作る」の意不可), 伊万里モノ(「焼く」の意不可), 茶道, 黒魔術(「使う」の意不可), 写真(「撮る」の意不可)

b. 熱帯魚を始める = 熱帯魚を飼い / 売り始める

例えば「ピアノを始める」では, (8)で見たように, 趣味・収集 と 商品としての取り扱い のどちらの意味にもなり得る. ここで重要なのは, (11)では「弾き始める」のような, 名詞を対象とする典型的な「その場の一回の行為 を始める」の意味には決してならないという点であり, 先に見た英語の場合と大きく異なる点である. (10)(11)共に名詞自体は動作を表さず, 「Nを始める」という環境では, Nの から分かるように, 意味的には「始める」の直接の対象ではないという点が重要である.

(12) a. Nを始める = Nの / Nとしての業務を始める

店, 屋台, 私設図書館, 老人ホーム, 病院, 薬局, 飲み屋, バッタ屋, 乞食

b. 店を始める = 店の営業を始める

(12)の名詞は施設や建物, また人を指す. しかし動詞「始める」はNのそのような面を対象にしているのではなく, 業務を行う場所や人として扱っている. これは, 建物や人を始める事はできないが, 業務は始めることができるからである. 「ゆすりたかり」は動詞由来名詞であるため, 「ゆすりたかりを始める」は その場の一回の行為 の解釈が可能である. しかしそれを日常的な業務として見ることもできるため, 職業として始めるという(12)の解釈も可能である.

(13) Nの一部を表す活動を始める

廃品回収業, 感想戦, 選挙戦, 茶番劇, オヤジ狩り

(13)は名詞の一部が活動を表す. 「始める」と共起すると, その活動を始める, という解釈が得られる.

【4】何を「始める」のか?

1節で生成語彙論による英語の begin a/the book の扱いを見た. そこでは, (i) begin は目的語が事象であることを要求し, (ii)目的語が事象でない時にはそれを事象化する動詞の補完がなされる, と主張されている. しかし(11)に見るように, (ii)は日本語では想定できない操作である. それでは2節・3節で見えてきたような解釈は, 日本語ではどのようにして決定されるのだろうか. そのメカニズムとして, 本稿は(14)を提案する.

(14) 「Nを始める」の解釈メカニズム

- a. 「始める」は目的語に事象を要求する(かも知れない)が
- b. その解消手段として生成語彙論が想定するような個体名詞を事象名詞化するタイプ強制を使用することはできない
- c. その代わりに, 「始める」は目的語名詞の意味の中に「始める」ことのできるものを探す
- d. サ変名詞・動詞由来名詞は行為を表すため, その行為を「始める」
- e. (10) Nの上映・上演 を始めるでは, パフォーマンスとしてのNを「始める」
- f. (11) Nの趣味・収集・練習 を始める / 商品としてのNの取り扱い を始める
では, Nそのものを「始める」ことはできないが, 趣味, 収集・練習の対象, 取り扱いの対象としてNを見ることができると, 趣味・収集・練習・取り扱いを「始める」

g. (12) Nを始める = Nの / Nとしての業務を始める では、業務を「始める」

h. (13) Nの一部の表す活動を始める では、その活動を「始める」

(14d)の事例が「Nし始める」と言い換えられるのは、動詞「する」を補完しているからではない。「する」の補完を想定するのは、原因と結果を見誤ることになる。Nが行為を表すから動詞として使う(=サ変動詞化)ことが可能なのであって、例えばNに対応するサ変動詞を「する」を読み込んでいるのではない。同じ理由で基底では「NをVし始める」形だったものを「Nし始める」と変形したものだと言明するのは理論的には可能だが、必要以上に強力な説明である。

【5】日英語の相違点と その場の一回の行為

英語についても日本語についても、実際にどの名詞がbegin・「始める」の目的語になり得るのか、それがどのような意味を持ち得るのかは、詳細な事実の掘り起しが必要である。その意識とは別に、ここまでは本稿の段階で分かっていることについて論じてきた。その範囲で言えば、日英語の違いは、「本」のように事象名詞・動詞派生名詞でない場合に、英語ではその名詞と密接に結びついている「読む」のような動詞補完が可能であるのに対し、日本語では(14f,g)にあげた 趣味・練習・取り扱い・業務 に関連した解釈だけが可能である。この違いは、その場の一回の行為 を表す動作を日本語では読み込むことができない(もしくはそのような意味を持つ動詞の補完はできない)とまとめることができる。

【6】結語

本稿では、「Nを始める」の解釈は動詞補完によるのではなく、Nの意味のどの部分を「始める」ことができるものと見なすかによって決定されると主張した。ただし、何が「始める」ことができるものであるのかを「Nを始める」とは独立して決定する方策が必要であることは承知している。例えば「番組」には始まりがあり、よって「番組を始める」は「番組を放送し始める」という その場の一回の行為 解釈が可能であると論じた。しかし「本」にも同様に始まりがあるのに、「本を読み始める」という その場の一回の行為 解釈は可能ではない。これは、「番組」が内容であるのに対し、「本」は個体物としての解釈が内容としての解釈より「本を始める」では優先されるためであろうと暫定的に述べることはできるが、今後の課題であると認識している。

参考文献

小野 尚之 (2005) 『生成語彙意味論』, くろしお出版。

黒田 航・飯田 龍 (2006) 「文中の複数の語の(共)項構造の同時的、並列的表現法: Pattern Matching Analysis (Simplified) の観点からの「係り受け」概念の拡張」 『信学技法』 106 (191), pp. 1-5. 電子情報通信学会。

黒田 航・井佐原 均 (2006) 「複層意味フレーム分析 (MSFA) による文脈に置かれた語の意味の多次元的表现: 実例に基づく MSFA の設計思想の解説」, 『日本認知言語学会論文集』 Vol. 6, pp. 171-181.

Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.